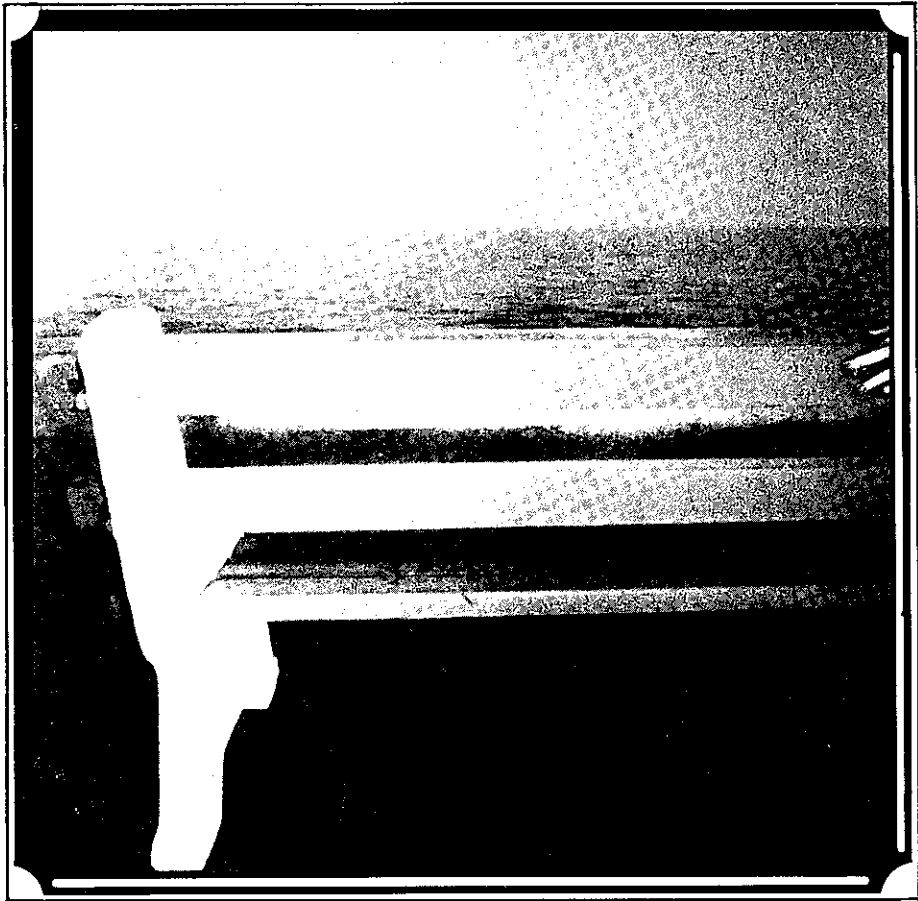


SMALL TOWN TALK Vol.9



★特集『ブラック・ホークはいま、日米の音楽に不満です』

関係者への公開質問状・松平維秋・大江田 信、菅野ヘッケル、遠藤 潔

- アルビオン・ダンス・バンド見聞記 森能文
- Let's Play——Matty Groves
- カタログシリーズ——トピックレコード
- BLACK HAWK COLLECTION REPORT 松平維秋

—Published by Small Town, June, '77—

Directed by Y. Mizukami

A 903 Villa Moderna. 1-3-18 Shibuya, Shibuya-ku, Tokyo

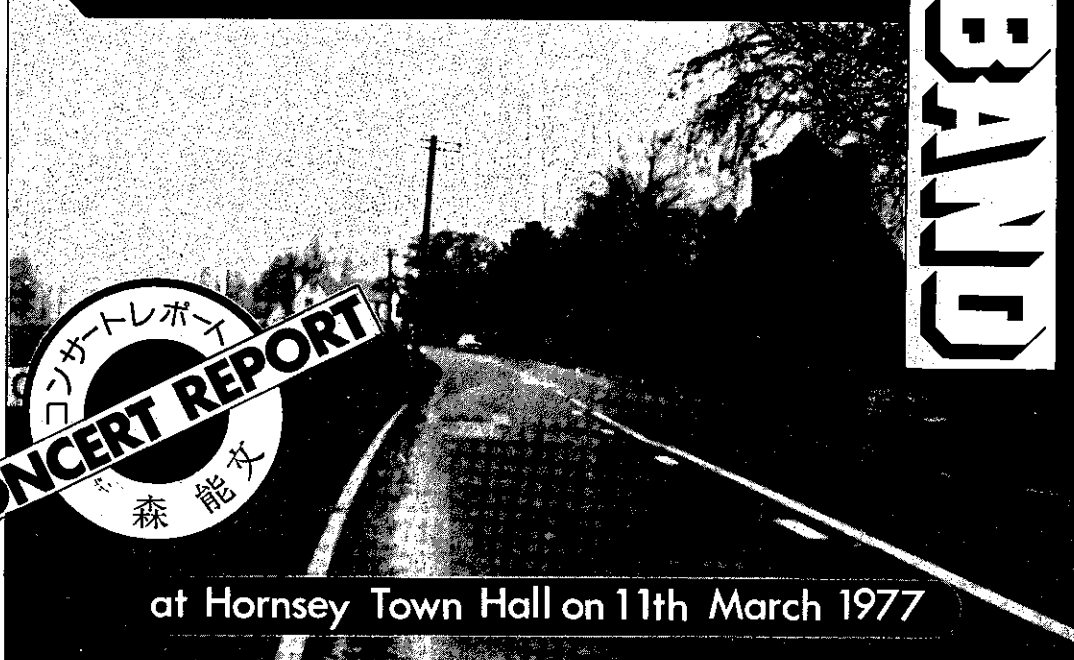


SMALL TOWN TALK

アルビオン・ダンスバンド見聞記

ALBION DANCE

BAND



at Hornsey Town Hall on 11th March 1977

アルビオン ダンス バンド 見聞記 森 能文

ロンドンの中心から北の方面へバスで30分程の所にあるHornseyの町で行なわれたこのコンサートは、English Folk Dance & Song Societyの主権によるもので、少々学術的な臭いの強い E. F. D. S. S. にとっては初めてのパワフルな (エレクトリックが入ったという意味) コンサートだということです。

時としてかなりヘヴィーな音を出すとはいえ、執拗にイングランドの音楽を追求しつづける ALBION の (ひいては Ashley Huthings の) 姿勢というものを E. F. D. S. S. としても無視するわけにはいかなかった、

というところでしょう。

アルバム "Prospect Before Us" と同じく "Uncle Bernard's Polka" と、彼らの Calling-on Song とも言うべき、"Albion Sunrise" のメドレーから ALBION DANCE BAND のステージは始まりました。そして、その演奏は予想に違わず素晴らしいもので、この一曲目からアンコールの曲に至るまで「完璧」の一言に尽きるという印象です。音量的にはかなり大きいのですが (曲によっては John Rodd のコンセルティーナも、John Tams のメロディオンもマイクを付けてアンプを通していました。) 音のバランスも非常に良く、演奏も全くラフなところがなく、エレクトリファイされていることによるデメリットは全く感じられませんでした。その意味では、Fairprt のステージが少々ラフな感じがしたのとは対照的に思えます。





SMALL TOWN TALK

アルビオン・ダンスバンド見聞記

今回の基本のメンバーは、Ashley Hutchings、Phil Pickett、John Rodd、John Tams、Simon Nicol、Graeme Taylor、Dave Mattacks、Michael Gregoryの8人で、古い弦楽器を担当していたJohn Sothcottの姿は見えませんでした。果してバンドを離れたのかどうかは定かではありません。

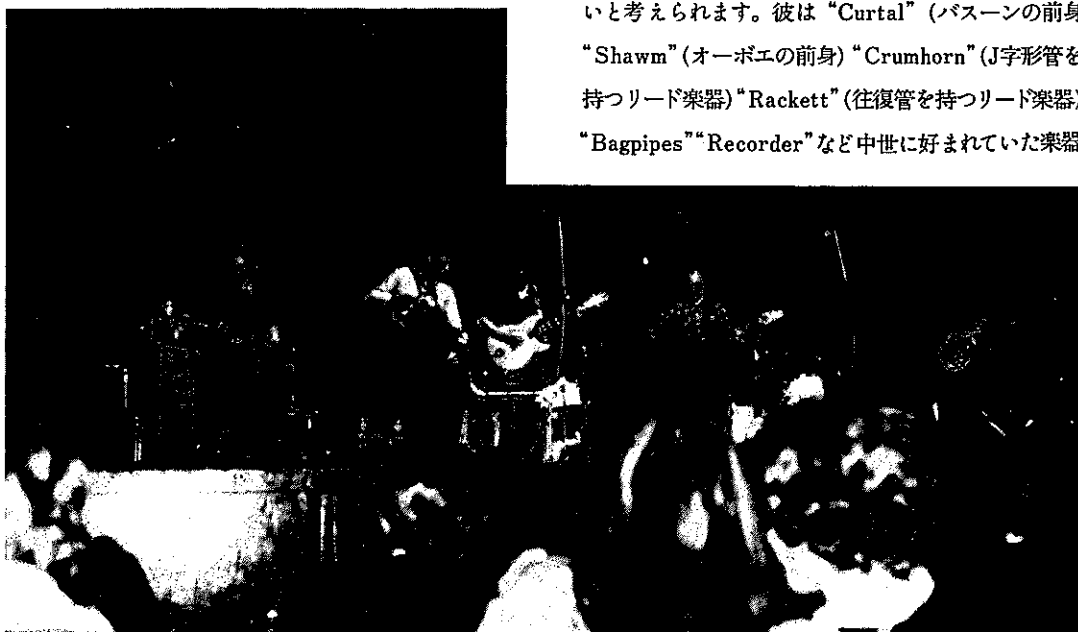
というものの、ALBIONのメンバーは時によって多少変動があるようで、コンサートの予告などではいつも、“ALBION DANCE BAND-Ashley Hutchings、Shirley Collins & Friends,” というような書き方をしています。時にはMartin Carthyが参加する時もあるとかで、Simon Nicolの他に二人目のギタリストとしてGraeme Taylor (元Gryphon)を入れたのも、現在Simon Nicolが、Fairportと、かけもちで演奏を行なっているのが、彼が参加できない時のことを考慮しているのかもしれませんが。

彼らによって演奏される曲に主に、“Prospect Before Us”と“Son of Morris On”から選ばれたもので、その他まだレコードに収められていない曲もいくつか演奏されますが、注目すべきことは、DANCE BAND

もやはりRichard Tompsonの曲を取りあげるといことです。

COUNTRY BANDが“New St. George”や“Nobody’s Webbing”を演奏していたのと同様に、DANCE BANDはTompsonの2ndに収められていた“We’ll Sing Hallelujah”を取りあげ、例によって巧みなアレンジで聴かせてくれました。(Tompson作のTrad-like Songsに対するFairport 派の評価は今だに高いようで、復帰したSimon Nicolを含む4人による最新のFairport Conventionも、Tompsonの1stに収められていた“Poor Ditching Boy”を演奏していました。

アルバムでも明らかなように、ALBIONのレパートリーには“Estampie”などの中世のダンス曲も含まれますが、これはALBION DANCE BANDでは、Morris Danceだけに限らず、広く中世、あるいはより古い時代のものまで、およそダンスと名の付くものはみな取りあげようと意図するAshley HutchingsのALBIONの方向性を考えた場合に古い管楽器のスペシャリストであるPhil Pickettの重要性はかなり大きいと考えられます。彼は“Curtal”(バスーンの前身)“Shawm”(オーボエの前身)“Crumhorn”(J字形管を持つリード楽器)“Rackett”(往復管を持つリード楽器)“Bagpipes”“Recorder”など中世に好まれていた楽器





SMALL TOWN TALK

アルビオン・ダンスバンド見聞記

を演奏しますが(このステージではCurtal, Crumhorn, Recorder だけでしたが) それぞれ非常に効果的に用いられており、時に幾つかの曲で見せた Recorder のテクニックは見事なものでした。

明らかに正規の音楽教育を受けたものと思われすが、そのような人でALBIONのようなエレクトリックの入った音楽に拒否反応を示さないのは、どちらかという貴重な存在と考えられるので、今後もALBIONを離れることなく、良い演奏を聴かせてほしいものです。

同様に、ALBIONがDANCE BANDであるという意味から重要な役割を占めている人物にEddie Uptonがいます。彼はALBIONがダンス・コンサートを催す時は、Caller(ダンスの踊り方の指導や、号令をかけたたりする司会者)となりますが、このステージではシンガーそしてダンサーとして出てきて、無伴奏の素晴らしいシンギング(彼の声は、本物のトラッドシンガーのそれと、John Tams がそれ程強い声の持ち主でないのに比べて、非常に強い声を持っています。)と、“Son of Morris Oh”に収められていた“Bonnetts So Blue”ではレコードと同様に、実に楽しいソロ・モーリス・ダンスを(ちゃんと衣裳を着て)見せてくれました。



そして、ALBION のもう一人のシンガーである、Shirley Collinsはそれ以上に感動的な素晴らしいシンギングを聴かせてくれました。時々無伴奏で歌った“Bonnie Bunch of Roses”は、何もせずともエコーのかかったような彼女の声がか会場一杯に響き渡り、圧倒的な迫力を感じさせました。

彼女は、その他に何回かバンドの伴奏で歌いましたがそれはここ数年ほとんど聴くことのできなかつた、“No Roses”を彷彿とさせるような“Electorified Ballad”で、それを見る限りでは、ALBION を使えば、いつでも“Son of No Roses”が作れるのではないかという気がしました。Shirleyも“Amaranth”を最後としないで、まだまだアルバムを作り続けてほしいものです。

Ashley Hutchings

と

Shirley Collins

コンサートの会場でAshley Hutchingsと、Shirley Collinsに会うことができました。

Ashleyは、あの神経質そうな顔(実際、音楽的にはそのとおり“mad scientist”と呼ばれる位、神経質に完璧を求める人ですか)に似合わずごく気さくな人で、遠来のファンを気持良く迎えてくれました。

日本でも彼に対する関心が非常に高い事を伝え、その証拠にALBIONの記事が載った“Small Town Talk Vol.8”をプレゼントしたら、非常に驚いた様子で、たいへん嬉しそうでした。特に現在の彼は、Fairport, Steeleye, Albion Country Band, Etchingam Steeleye, Albion Country Band, Etchingam Steam Bandと、なかなか自分自身の音楽を満足できるBandに恵まれなかつた後、やっと自分がリーダーとして満足のいく演奏ができるBandに恵まれ、充実した



SMALL TOWN TALK

アルビオン・ダンスバンド見聞記



日々を送っているからでしょうか、非常にはればれとした顔をしていました。コンサートの後で会った時も非常に満足した顔で、彼の常に言っている“the Sheek fun of playing”ということをそのとおり実践しているように感じられました。

そして彼の愛妻である Shirley Collins は声といい顔といい、あの美しいブロードのウェーブの具合といい、すべてレコードで聴くのと、写真で見ると全く同じで(当然ですが) Ashley と同じく (Shirley の場合は顔に似合って) 非常に親しみやすい人で、コンサートのあと出口のところで ALBION のレコードや Ashley がつい最近出した本 “A Little Music” を買った人たちに気軽にサインをしていました。彼女も Ashley と同じく ALBION DANCE BAND の日々完全に満足しているようで、ほがらかな笑顔で遠い極東のパラッド・ファンを迎えてくれ、彼女のバラッド・シンギングに対する大げさなくらいのほめ言葉に顔をほころばせていました。

二人共、次回は東京で会おうと言ってくれましたが、一応、外交辞礼と考えておいた方が良いでしょう。何といっても彼らは総勢10人を越す大所帯なのですから。

RECORD SHOP

●池袋 - 音盤洞では……

※毎週変わるスペシャルプライス・コーナー
 スペシャルプライス・レコードを毎週、入荷
 のレコードより厳選し、皆様に提供いたしま
 す。1週間単位でレコードを入れ替え、価格
 は、¥1,000～¥1,680、2LPは¥2,680です。
 名盤、貴重盤も続々このコーナーに登場!

◎通販希望の方は、必ず往復ハガキで問い合わせ
 てください。在庫の有無をお知らせ致します。
 AM 11:00～PM 8:00
 ☎983-7768・豊島区西池袋3-26-1近見ビル 1F.

音盤洞